

2024年10月12日

島崎賢志郎

第358回山口西田読書会のプロトコル（2024年10月5日開催）

【テキスト】

- 第四巻「左右田博士に答ふ」四 301頁～302頁4行目まで
- 補足として、第十四巻「現代に於ける理想主義の哲学」第三講 客観主義 22頁～24頁5行目まで

【キーセンテンス】

（リッケルトのように、意識一般を単に判断意識に狭めてしまった場合）「如何にして超越的なものが我々の思惟に対して当為となるのであるか、対象自体といふ如きものが何故に我々に真理として承認せられなければならないのであるか。真理などいへば云ふまでもなく、価値といふも既に主観的意味を有って居るのではないか。」（301頁10～13行目）

【問い/考えたこと】

- ① 「思惟と（純粹）経験の区別」について
純粹経験は、言語化されるのをどこまでも拒むものであるとご説明頂きましたが、そうして言語化できない次元を想定すること自体が（思惟には言語以前の領域がなければならないと考えること自体が）まさに論理的要求であり、思惟の創造の産物なのではないか？（その意味で思惟の方が本質的なのではないか？）
（これに対し西田は何と答えてくれるのか？）
- ② 「キーセンテンスの西田の反問」について
ここで西田が真理や価値と関係づけている「主観的意味」の「主観的」とはどのような意味か？